



第31号

(年2回発行)

発行所
喜多流大島能楽堂

〒720-0814
広島県福山市光南町2-2-2
TEL 084-923-2633

次の世代へ

能楽シテ方 喜多流職分

大島 輝久

此度、文部科学省より重要無形文化財保持者の認定を受けました。私は喜多流においては谷間の世代で同年代が少なく、なかなか後輩も入って来ないという状態が長く続いて、修行時代の十年間ほど一番下っ端として過ごしました。その為か、未だに「先輩に付いて行けば何とかなる。」という他力本願的な考えが抜けきらないのですが、この度の認定を受けて、これまでの考え方を根本的に改めなければならないと遅ればせながら感じています。

最近ではようやく後輩も増え、我が子達が子方を勤められるような年齢になってきた事もあり、少しずつ立場が変化してきました。成長が手に取るように分かる子供の稽古というのは面白くやり甲斐のある事ですが、とにかく体力が低いです。子供達は総じてテンションが高く、小さな体に大きなエネルギーを抱えています。

ただ能は非常に制約の多い芸能で、子供といえども一つの形、枠に嵌めざるを得ません。共に話し合いながらその事を身を以て伝えるには、教える側に子供を凌ぐ膨大なエネルギーが必要です。

私が子方時代の稽古は祖父久見がしてくれていましたが、今思い返してみても祖父が稽古に注ぐ情熱は大変なものでした。本番が近づいてくると祖父は出稽古から夜遅く帰って来るなり、食事も摂らず「輝久、稽古するぞ!」と私を舞台に引っぱり出しました。内心は「今から稽古するの?」と思っていました。祖父の余りの勢いにただ従う事しか出来ませんでした。当時の祖父は七十才を過ぎていたにもかかわらず、そのエネルギーは圧倒的なものがありました。

国が定める教育方針が年々変化するのを見ても分かるように、指導の方法に正解というものは無く、教える側は常に「これでいいのか?」と自問自答を繰り返し、多くの失敗と少しの成功を



仕舞「岩舟」大島輝久 (2014.11.30) アステールプラザ能舞台
地謡 大村 定 長田 驥

積み重ねながら前に進んでいくよりありません。ただ指導者として実績を上げていく方々に一つ共通している要素は、情熱家であるということだと思います。私自身が能を続けて来られたのも、子供の頃、祖父から注がれた情熱に未だに引つ張られているからだ、と教える側を経験するようになった今、強く実感しています。

- P2 よしなごころ 横山 晴明
- P4 尾張徳川の地で 二世 井上松次郎(靖浩)
- P6 私と能との出逢い 金子直樹

よしなしごと

能楽小鼓方 幸流職分

横山 晴明



横山晴明氏

1935年生れ。

能楽小鼓方 幸流職分

国総合認定重要無形文化財

幸流小鼓幸正会代表

故 幸祥光および 故 幸正影に師事。

2002年 観世寿夫記念法政大学能楽賞を受賞。

2007年 第64回中国文化賞を受賞。

2009年度 広島県教育賞・広島県教育奨励賞を受賞。

鼓(大・小)の皮は馬です。狐ではありません。(あれはお芝居) 太鼓は牛です。ことに小鼓は高品質を必要とするので、「胎児の皮を使う」などの言い伝えもあります。大切に使用すれば二百年以上の寿命がありますが、一旦破れたらおしまいです。大鼓の皮は消耗品なので、少々歩いている馬でもかまいません。鼓の筒(どうー音響箱の部分)は山桜で、学名には無い「ウスズミザクラ」とか「コガザクラ」等の大木(直径一メートル以上)から中心を除けて五本取材(梅鉢取りと云う)します。年輪を見れば木取りの状態がわかるので、これはバイオリンの材質選びに似ています。能の鼓は、謡の伴奏ではないのです。ですから、謡が主で鼓が従ということではなく、つかずはなれずに流れるので、昔から「仲の良い夫婦の背中合わせ」とか申します。どちらがまずいと、一方へおんぶということになり、なかなか双方伯仲とは参りません。ときたま工合の良いことがあると、それが忘れられず、病みつきになって始末の悪いものです。六代目菊五郎の辞世に「まだ足りぬ踊りおどりのあの世まで」とは、その執心の一片でしょうか。

能の鼓は、一ト動作で一音のひびきが完成するので、歌舞伎の鼓のように一ト振りで二つも三つも打つことはありません。ひびきを考えず、無闇に早く打つのは、能ではご法度で、位(速度)には自ずから許容の限度があります。

鼓の粒(音)は、数を惜しんで打つので、打つ所より静止している空間を大切にいたします。九州の幸宣佳先生の教えに「音より声です。手よりも間です。一音は手です。声は間です」の名言があります。先生は鼓の打ち方について多くの公案(禪のナゾかけ)もどきのことをおっしゃっていました。

「手を下ろして曲げるだけ」とか「右の掌をお腕にして水がたまるように」とか「左手は打って放すので(て)の字の間は放すな」とか枚挙にいとまがありません。絶対のカンどころを説いておられるのでしょう。

ともかく生きておれば何か功德はあるもので、小生、まことに遅ればせながら、七十才を過ぎてから物の感じ方がはかどったように思います。五十・六十代にした事で「アレは嘘ではないか」と気付くことしきりです。

俗に云う「老人力」でしょうか、気を放さず過していれば、これまで集めた捨て石が働き、ものの光(実体)が見えてきますので、皆様方、それを楽しみに、なるべく死なないで生きていきましょう。

(乙未年立春日)



能「清経」シテ 大島輝久 (2014.9.21) 大島能楽堂
大鼓 亀井広忠 小鼓 横山清明

尾張徳川の地で

能楽狂言方 和泉流山脇派
二世 井上松次郎(靖浩)

私の所属する『狂言共同社』は、尾張徳川藩お抱えであった役者たち(和泉流発足の祖)が明治維新における廃藩置県などに起因して荒廃・衰退し、藩由来の芸系伝承と装束や面などの散逸に歯止めをかけるべく、町人・商人ら素人弟子衆によって設立された結社です。明治二十四年の創立から今日まで百二十余年を経ます。私の先祖も城下で元禄年間より代々仏具商を営みながら狂言を手習い事に、またサークル活動的に嗜んでいたと聞き、設立発起人の中に初代井上菊次郎も名を連ねておりました。

『家』という単位を核に展開されてきた能楽界にあって、この組合的役者集団は云わば異端児的な存在。各々生業は他に持ち、狂言収入は一括して装束・面類の購入や補修に充てるなど、決して生活の糧にしてはならぬ掟。純粹に狂言を愛好し着実に継承するという精神は、近年まで脈々と受け継がれてまいりました。故にこの精神を『無償の愛』『美德』と賛美される方もある一方、『片手間』『適当』と捉える方もお



二世 井上松次郎(靖浩)氏

能楽狂言方 和泉流山脇派

国総合認定重要無形文化財

1971年(昭和46)生れ

四世井上菊次郎長男

祖父・父に師事

「いろは」(1979年)初舞台

奈須興市語、三番叟、翁付面箱、千歳、釣狐、金岡、花子(2007年10月)を披く

第10回名古屋青年会議所TARG賞文化部門賞受賞

名古屋市民芸術祭審査員特別賞(2000年)受賞



父・四世菊次郎(祐一)とともに大学までは横浜に居住、当時は故和泉元秀の下、主に東京での舞台公演を通して修業、経験を重ねてきた。

東京藝術大学で狂言を専攻、在学中は野村萬・万作両師の指導も受けた。

卒業後、佐藤融・野村信行(現又三郎)とともに「狂言なのり座」を結成。

狂言共同社の若手と「ナディア狂言」を主宰。

金城学院大学非常勤講師。 名進研小学校伝統文化講師。

朝日カルチャーセンター講師。 名古屋女子大学狂言部指導。

の出演楽師の構成、こうした事を考慮し配慮しながら、能の一員としてその演目の持つ品位を損い壊す事無く、位取り豊かに肅々と勤めるに誰を問狂言に据えるが相応か。これを優先して配役すべき事です。狂言方にとっていかに問狂言が重要であり、同時に問狂言の出来不出来によって能楽における狂言方の価値が計られる。狂言に流儀流派があり台本・演出が異なるように、能にも数多の流儀流派が存在します。それだけ問狂言にも演出のバリエーションは拡がり、役どころ設定も異なれば立ち位置も違う、これらを熟知していなければ当然務まりません。殊にかつ貴重であり、観世・宝生とは異同も多く、また「翁・三番叟」においては、上掛り二流の千歳役はシテ方が演じますが、下掛りでは狂言方が面箱持ちと兼務して千歳之舞を舞います。地方中心に活動していると、どうしても所属地域常駐の流儀に偏りが生じます。幸い私は東京の式能で喜多流と、地元で金春流と経験をさせてはいただきましたが、未だ千歳を初演した事のない狂言方重鎮も我が地区にはおります。氣心したれた地元の楽師同士ならば、一見気兼ねなく演じられると考えつつも、裏返せばそれだけ他の演出を知らずに、また経験出来ずに過して行くこととなります。ここが地方の現状でもあり辛い宿命でもあります。父の四世菊次郎(祐一)と私は東京での修業時代、この問狂言の価値を痛感しながら、各流派の舞台を数多く経験させていただきました。これら身を以て積ませていただいた経験が、何にも代えがたい財

産となり幾分か自信となつて今があるとも思っています。

近年の能楽界はバリエアフリーならぬエリアフリー。地元の催事に地元の楽師が必ず招かれるという時代は終わりました。ご依頼も指名制であり、誰でもいいから役付けをという共同社的発想も今は昔。舞台成果を挙げて信用信頼される楽師が招聘される時代、プロとして当然の雇用関係ですが、それはどの地域でもどの流儀との組み合わせでも対応出来ねばならない器用さと責務を負います。わたくしは共同社の是までの掟を云わば『謀反』して専業になりました。仏具商は祖父・三世菊次郎(初世松次郎)を以て廃業。述べる迄もなく是が本来あるべき姿、不安もありましたが今では揺ぎ無く良かったと、これは自負しています。

東京藝大時代の講師陣や諸先輩、同輩や衣恵師など有能で志高き姿勢を持った後輩たちと楽屋を共にする幸せ。また私ごとでもありますが、先般輝久師や光信寺薪能で一緒にするワキ方の江崎欽次郎(敬三)師などとともに、文化庁より重要無形文化財認定の榮譽を受けました。彼ら同世代とも交流を深めつつ、舞台共演出来る事の喜びも噛みしめながら、是に恥じない舞台成果を挙げねばと身を律して刺激になります。同時に四十代も半ばへと向かい、教えを乞う側から次代へ繋ぐ世代にもなつてまいりました。手本・模範となるべき世代。

昨今狂言各家は法人化・会社化の傾向、役者・装束の管理といった点においては、共同社の精神や形態が今や老舗・先駆者的であつたと思う

ところですが、能楽界の一員として土俵に上がるべき精神は、私どもの方が見習い・近付き・向上せねばならぬ点が殊更多かつたと自認しています。五代に亘り続いてきた先人の歴史に感謝しつつも、井上菊次郎家として『狂言師』に非ず留まらず『能楽師』でありたい、と自覚した次第です。

自らハードルを上げてしまいました……。



狂言「口真似」 井上蒼大 今枝郁雄 井上松次郎 (2014.8.10) 光信寺

私と能との出逢い



金子直樹

かね こ なお き
金子直樹氏

能楽評論家、日本芸術文化振興会プログラムオフィサー。
1954年東京生まれ。
中央大学法学部卒業。
学生時代から能楽の評論及び普及活動を始める。
国立能楽堂開場以来のプログラム執筆。
『能楽タイムズ』『花もよ』の能評をはじめ、解説、評論、
講演などを中心に活躍中。
近著に『能鑑賞二百一番』『狂言鑑賞二百一番』(淡交社)。

能との出逢いは天麩羅

「金子さんは大学教授ではないのですか？」。
能楽評論家などという怪しげな名刺を見ながら、
いったいこの人は何者なのかしら、という好奇心
満々のご質問に答えるため、ここに私の素性と
立ち位置を明らかにさせていた、だくことにな
りました。

私の家は、祖父金子霞璋の代まで池坊の華道家
でした。祖父と能との直接的な関係は、昭和
四十三年に観世鏡之丞(雅雪)、昭和四十五年
に十八世宗家宝生英雄の二度にわたり、能「半
蔀」立花供養の舞台に立花を立調したくらいで
しょうか。しかし、祖父のところに稽古に来て
いたお弟子さんの中には、歌舞伎役者や能楽師
の奥様がいらつしゃいました。そうした方々か
ら、ご主人の出演する舞台の招待券をいただく
ことがありました。歌舞伎は家族皆が喜んで行
くのですが、能楽堂は誰も見向きもしません。
困った祖母が、当時中学生だった私に条件を付
けて同行させました。その条件とは、帰りに美
味しい天麩羅を食べさせてくれるというもの。
当時飯田橋近くの大曲にあった観世会館に行っ
てぐつすりと睡眠をとり、帰りに神楽坂で美味
しい天麩羅を食べる。これが私と能との出逢い
でした。一方、中高一貫教育の男子校に通って
いた私は、中三・高一の古文を恩師羽田昶先生
に担当していただきました。教科書に「井筒」
が載っていたのですが、普通の古文の教師なら
敬遠してしまう素材を、羽田先生は謡を一節交
え、丁寧に講義してくださいました。当時先生

は狂言和泉会に關つていたことから、私を含む学生有志を水道橋能楽堂(現在の宝生能楽堂の前身)に案内していただき、狂言に接するチャンスをごいただきました。その時に観た、六世野村万藏と九世三宅藤九郎の「宗論」の素晴らしい舞台が、私の狂言の原体験になりました。

運命的な出逢い

大曲から渋谷区松濤に観世能楽堂が移転して間もなく、祖母に連れられて行った能の会で、運命とも言える出逢いをするようになります。それは「阿漕」との出逢いでした。それまでずっと、うたた寝しながら眺めていた能舞台は、まるで博物館のガラスの向こう側の世界で、私は全く無関係なものだと思っていました。ところが「阿漕」を観て圧倒されました。漁師の家に生まれて生業を営むことが殺生の罪として断罪される不条理。救済を求めながら救われず、何度も繰り返すであろうシジフォスの神話のごとき苦悩。思春期の多感な青年だった私は、こんな人間存在の本質に迫るドラマを、まさか能楽堂で観せられようとは思ってもいなかったのに、雷に打たれたようなショックを感じ、能というものに熱中することになりました。

勉強はOJT

中央大学法学部に進学した私は、通りかかった部屋の中から聞こえた謡に惹かれて扉を開けたことが運のつきで、能のサークルに加入し、観世流の謡と仕舞を稽古することになりました。体育会系ともいえるサークルは朝から晩まで稽

古づくめ。それ自体はいいのですが、あまり能を観に行かないのです。舞台を観るのは稽古の足しにするためと考えていたのか、師匠とそのグループのものしか見ず、他の舞台は稽古の支障になるから観るな、という指導方針でした。当時のスーパースター観世寿夫をはじめ、宝生流の高橋進、金春流の櫻間道雄、金剛流の豊嶋弥左衛門、喜多流の後藤得三といった人間国宝の舞台に心酔していた私には、サークルの方針が堅苦しく感じました。同時に、観世流の稽古をしていると、他流の舞台を観たときに不自然に感じることも気付きました。そこで二年でサークルを辞し、他大学の友人も誘って鑑賞・普及・評論を行う団体を立ち上げました。羽田昶先生とは大学入学時に再会し、そのご紹介で当時東京国立文化財研究所や武蔵野女子大(現武蔵野大学)能楽資料センターに伺い、横道萬里雄先生や小林貢先生をはじめ、多くの先生方と面識を得ました。能を観た帰りに一献傾けながら感想を述べ合い、たくさんの勉強をさせていただきました。私の能に関する知識と教養は、大学の講義という座学ではなく、能楽堂と飲み屋で形成された、まさにOJT(オン・ザ・ジョブ・トレーニング)でした。

喜多実先生との出逢い

就職する頃はオイルショックの影響で世の中は不況。国立能楽堂もまだ形もなく、能関係の仕事で生活していく術はありませんでした。当時付き合っていたガールフレンドから、将来の結婚を見越して安定した職業に就くよう尻を叩

かれていたこともあり、東京で地方公務員になることにしました。水道橋能楽堂が近いという理由だけで九段下のオフィスに入りましたが、予想に反し毎日残業の日々。学生時代の能楽三昧の生活とは大きく変化しました。そんなある日、卒業論文ではありませんが、羽田先生のご紹介で「能楽タイムズ」に初めて書いた能評(香川靖嗣師の「海人」、私のメジャーデビューです)に目を留めた喜多実先生から人を介して面会の打診がありました。目黒の喜多会の演能の後、恐る恐る出向いたホテルのラウンジで実先生とお会いしたのですが、開口一番、ご自分の舞台の批評に対する不満を聴かされました。ご自分がどう思うか考えで演じられたのか、批評家はなぜそれを感じ取ってくれないのか。孫ほどの年齢の初対面の私に対し、真剣に語ってくださいました。後から思えば、私の能評への警鐘であつたのかもしれない。それから何度もお話を伺うチャンスを得、当時の雑誌「喜多」にペンネームで能評を掲載させていただきました。当時の喜多流は後藤得三、喜多実両師をはじめ、友枝喜久夫、粟谷新太郎、粟谷菊生といった名手が揃っていました。友枝昭世師をはじめとした若手の「果水会」では、東京にいらした頃の大島政允師の舞台も拝見していました。

能楽評論家?

国立能楽堂の開場にあたり、スタッフにならなにかとお誘いもいただいたのですが、地方公務員としての仕事が面白くなってきたところだったので、残念ながら辞退させていただきま

した。公務員の仕事は都市計画や災害対策から高齢者福祉や生活保護、文化センターや教育など、三年程度で異動があり、転職を繰り返すようなものでした。私は三十四年間で十一の仕事を経験しましたが、多くの人々との出会いが、広い視野と洞察力を養ってくれましたし、それが能の観方に与えた影響も大きいと思います。

一方、国立能楽堂からはプログラムの作品解説の執筆というチャンスをいただき、平日昼は公務員、平日夜と土日は能楽堂通い、朝四時に起きて原稿執筆という二足の草鞋生活が始まりました。能楽懇談会に始まり楽劇学会や能楽学会など様々な出逢いの場で多くの方々とお知り合いになる中、「狂言ハンドブック」や「能・狂言事典」などの執筆にも参加させていただきました。「能楽タイムズ」の月評を書かせていただいたりするうちに、「おまえの肩書は何だ？」と尋ねられ、いつのまにか「能楽評論家」という怪しげな名刺を渡すようになりました。

現在に至る

今は「能楽評論家」として「能楽タイムズ」や「花もよ」に書かせていただいています。国立能楽堂プログラムの執筆をはじめ、能の会のプログラムへの解説執筆や演能前の講演、講座の講師や新能でのイヤホンガイドなど、様々な仕事をさせていただいています。偉そうに淡交社から著書も出版していただきました。公務員生活は三年前にピリオドを打ちました。歳とともに二足の草鞋の重さに耐えかねたこともありま

す。しかし、能以外の世界で生計を維持できたことは、私にとって能の世界で妥協しなくて良いというメリットを与えてくれました。能をビジネスにすることで、場合によっては公正さを欠く批評や行動を目にすることもある中で、私は恵まれた立場にあると感じていました。退職後は年金もいただき、慎ましく老後を過ごす程度の蓄えもあるので、基本的なスタンスは変わっていません。日本芸術文化振興会(基金部)のプログラム・オフィサーをお引き受けしたのも、利害関係に縛られずに発言できるからです。能楽が好き、能楽に純粹な愛情を持っている、それが今の私の基本的な立ち位置でしょうか。ですから、「燦ノ会」の立ち上げに遭遇し、輝久さんたち若い役者の意気込みを感じて応援したいと思いました。梅若の山村庸子さんの主催する女流能楽師の舞台で衣恵さんを初めて観たときの、鶴澤久さんを観たときに次ぐ衝撃も忘れられません。そして福山にお邪魔し、立派な能楽堂とそれを運営する努力、中国・四国地方の喜多流能楽師の実力にも感銘し、お手伝いできることがあればということ



演能後のアフタートーク (2014.11.16)
大島衣恵 金子直樹 久田舜一郎



能「三井寺」シテ大島政允 子方大島伊織(2014.11.16) 大島能楽堂 池上嘉治撮影
ワキ 福王茂十郎 大鼓 白坂信行 小鼓 久田舜一郎 笛 森田保美





能「半蔀」シテ 大島輝久 (2014.8.24) 東京喜多能楽堂 池上嘉治撮影



能「殺生石」女体 シテ 大島衣恵 (2014.9.21) 大島能楽堂 池上嘉治撮影
大鼓 亀井広忠 小鼓 横山幸彦

能「海人」シテ 大島衣恵 子方 大島薫子
(2014.11.3) 岡山後楽園能舞台
池上嘉治撮影



2015年 演能ご案内

開催日	催し名	開演	会場	鑑賞料	演目
4月19日(日)	第241回 大島能楽堂定期公演	12:30	喜多流大島能楽堂	年間共通券 20,000円 一般券 6,000円 学生券 2,000円	能 「湯谷」 大島衣恵 狂言 「舎弟」 茂山宗彦 能 「阿漕」 大島政允
5月17日(日)	社中追善 喜多流春の会	11:00	喜多流大島能楽堂	無料	舞囃子・仕舞・素謡等
6月21日(日)	第242回 大島能楽堂定期公演	12:30	喜多流大島能楽堂	年間共通券 20,000円 一般券 6,000円 学生券 2,000円	能 「富士太鼓」 大島衣恵 狂言 「魚説教」 茂山千三郎 能 「舍利」 松井 彬
6月27日(土)	福山大学開学40周年 記念 喜多流能楽公演	11:45	福 山 大 学	要招待券	仕舞 「高砂」 大島政允 能 「羽衣」 友枝昭世
8月 9日(日)	三和の森光信寺新能	18:30	光 信 寺 (神石高原町)	一般券 3,000円 学生券 1,000円	舞囃子 「紅葉狩」 大島衣恵 狂言 「魚説法」 井上蒼大 能 「橋弁慶」 大島輝久
8月17日(月)	後楽園幻想能舞台	18:30	岡山後楽園能舞台	鑑賞券 6,000円	狂言 2番 能 「枕慈童」 大島衣恵
9月20日(日)	第243回 大島能楽堂定期公演	12:30	喜多流大島能楽堂	年間共通券 20,000円 一般券 6,000円 学生券 2,000円	能 「東岸居士」 金子匡一 狂言 「お茶の水」 茂山 茂 能 「紅葉狩」 大島輝久
10月18日(日)	福山総合文化祭 秋の会	未定	喜多流大島能楽堂	無料	仕舞・素謡
10月21日(水)	燦 の 会	18:45	東京喜多能楽堂	S席 5,000円 A席 4,000円 B席 3,000円	能 「井筒」 大島輝久
11月15日(日)	第244回 大島能楽堂定期公演	12:30	喜多流大島能楽堂	年間共通券 20,000円 一般券 6,000円 学生券 2,000円	舞囃子 友枝昭世 お話 帆足正規 狂言 「萩大名」 茂山千五郎 能 「江口」 大島政允
11月23日(祝)	広島大島会 秋の会	13:00	妙慶院(中区)	無料	仕舞・素謡
12月20日(日)	喜多流自主公演	12:00	東京喜多能楽堂	一般券 7,000円 要指定席券	能 「橋弁慶」 大島輝久

- 中国新聞コラム「生きて」に大島政允の取材記事が3月11日より4月2日まで15回にわたり掲載されました。丁寧に辛抱強く取材をして下さったK記者に感謝。解り易い文章で、能への理解が深まったと好評判です。
- この取材期間に鞆浦の石碑のことで質問を受け、古い石碑の拓本と平成7(1995)年に80年ぶりに再演した能「鞆浦」の写真屏風を稽古場に出してみました。春休みに東京より帰ってきた孫たちにも見せてやれて良かった!
- 3月29日(日)、三豊市宗古史跡能天気予報では雨天だったのですが、地元の方々の熱意で驚くほどの晴天となり無事に終了。毎年温かいおもてなし有難うございます。
(大島泰子)



舞囃子「猩々」大島伊織 (2014.11.3) 岡山後楽園能舞台
太鼓 梶谷義男 大鼓 守家由訓 小鼓 横山幸彦 笛 八木原周平

喜多流大島能楽堂

〒720-0814

広島県福山市光南町2-2-2

TEL 084-923-2633

FAX 084-923-8730

<http://www.noh-oshima.com>